

入選童話 三等

め
た
か

米 田 ヨ ネ

あたりがすっかり縁になつたお空には、端午の節句を祝ふ鯉幟が元氣よく風にゆられてるました。

お空は青葉の日本晴で小川の水もチヨロ／＼ミ音を立て、流れてゐる様でした。

其の小川の廻りくねつた水溜りに可愛い、メダカさんの小さなおうちがありました。おうちは杭ミ杭ミにはさまれた、本當に小さなおうちでしたけれども、お座敷もあればお倉もちやんこある立派なおうちでした。

きれいなお水を通して金色のお日様の光がユラ／＼とおうちの中に差し込む、メダカ

さんのお母さんは、

「これ〜お日様がお目覚めだよ、さあ〜お目々を覺ましてごらん」

ミ子供のメダカさんを起しました。起されたメダカさんの子供は、

「眠いなあ、眠いなあ」

ミ言ひながら美しいお水でお顔をサラ〜〜ミ洗ひ、御飯を頂きました。するミお母さんは

「これ〜、みんなお聞きよ、みんなはまだほんの生れたての小さい子供だから遠い所へ行つちやいけませんよ。此の小川にはね、みんなよりも、もつ〜〜大きいおさかながるんですよ」

「大きいおさかなつてぎんなの」

ミ子供達が聞きますミお母さんは

「鮎さんやらお髻の生えてゐる鯉の小父さんやらがゐて、みんながお母さんの言ふ事を聞かな

いでおうちから外へ出やうものなら、うつかりするこバクリ〜こ喰べられるかも知れませんが」

「やう、バクリこ喰べるつて怖いわねえ」

こ子供のメダカさん達は、自分より大きなおさかなの事をお母さんから聞かされて、きつこお母さんの言ふ事を聞く事をお約束しました。

それからしばらく子供のメダカさん達はおうちで楽しく遊んでゐましたが、あまりお遊びに夢中になつてついお母さんの言ひ付けを忘れてひよつこりおうちを飛び出しました。子供のメダカさん達は小川の中をあつちへ行つたり、こつちへ行つたりして嬉しさうに泳いでゐる中にだん〜おうちから離れて行きました。もうおうちの事なんかすっかり忘れて一生懸命になつて遊んでゐますこ丁度、小川の側の一軒のおうちの所まで来た時です。

そのおうちにはね、可愛い坊やのお節句を祝ふ鯉轡がサラ〜屋根の上へ上げられてゐました。

する。其の大きな鯉轍の影が小川の中に映つてゐるのです。フト上を見上げた小さなメダカさんはびつくりしました。

「オヤ、なんだらう」

「こ兄さんが言ひます。他のメダカさんも」

「なんてまあ大きなお口だらう」

「なんてまあ大きな身体だらう」

兄さん、お母さんがね言つた大きなおさかなつて之かも知れないよ」

「ウン／＼さうだよ、あの大きな大口で僕等をバクリミ喰べるんだよ、お母さんの言ひつけを守らないからさあ」

「子供のメダカさんはお母さんのおつしやつた事を思ひ出しました。」

「ああ、みんな早く歸つてお母さんにお詫びしませう、大きなおさかなさんに喰べられない中

」

「ご兄さんのメダカさんが先頭になつて歸りかけやうとした時です。

さつきの鯉幟に夏の涼しい風がサーサーと吹きました、鯉幟の先に付いてゐる矢車がガラガラ音を立てますと、大きい鯉幟の影が小川の中で揺れて、まるで泳いでゐる様に見えました、

ガラ／＼音を立てゝゐる矢車はプロペラの様に見えたのでせう、びつくりした様に

「兄さん、大きいおさかながね、あそこから追つかけて来るよ、飛行機の様プロペラを付けてらあ、早く歸らうよ、お母さんが待つてゐるから」

「ご子供のメダカさん達は急いでおうちへ歸りました。

それからお母さんの言ひ付けをよく守つて遠くへ遊びに出ない様になりました。